

精神病医斎藤茂吉の原風景

小 泉 博 明*

【要旨】 斎藤茂吉は、蔵王山を臨む山形県金瓶村から養父紀一の許に上京し、浅草医院に寄宿し、東京帝国大学医科大学を卒業した。その後は精神医学者として軌道に乗り、東京府巢鴨病院医員、欧州留学後は青山脳病院院長に就任した。精神病医茂吉を醸成した原風景から臨床医茂吉の人間性を考察した。

1. 浅草三筋町と浅草病院

斎藤茂吉は山形県南村山郡金瓶村（現上山市）から、その夙慧を見込まれ、1896(明治29)年、浅草医院（浅草区東三筋町五十四番地）を開業していた養父紀一の許に上京した。また、1899(明治32)年に紀一は、別に東都病院（神田区和泉町一番地）¹⁾を開業した。その後、紀一は欧州に留学し精神病の研究と視察を行い、帰国後に東都病院を改築し精神科を専門とする帝国脳病院を、さらに青山脳病院（赤坂区青山南五丁目）を経営したのであった。茂吉には『三筋町界限』という随筆があるが、当時の浅草病院の診察風景を次のように言う。



斎藤茂吉像（筆者撮影）

父の開業していた浅草病院は、大学の先生の見離した病人が本復したなどという例も幾つかあって、父は浅草区内で流行医の一人になっていた。そして一つの専門に限局せず、何でもやった。内科は無論、外科もやれば婦人科もやる、小児科もやれば耳鼻科もやるというので、夜半に引きつけた子供の患者などは幾たりも来た。そういう時には父は寝巻に襦袢のままで診察する。(略) 今まで人事不省になっていた孩児が泣きだす、(略) 母親が感謝して帰るといようなことは幾度となくあった。硝子を踏みつけた男が夜半に治を乞いに来て、それがなかなか除かれずに難儀したことなどもあった。咽に魚の骨を刺して来たのを妙な毛で作った器械で除いてやって患者の老人が涙をこぼして喜んだことなどもある。まだ咽頭鏡などの発明がなかった頃であるから、余計に感謝されたわけである。²⁾

* 教授／日本思想

内科医を主とする開業医であった紀一が、多くの患者に感謝されたことを髣髴させる。しかし、精神病医に対しては次のように言う。

そのころの開業医と患家とのあいだには、そのような親しみもあり徳分もあったものである。しかし父も精神科専門になってからはそういう患家との親しみは失せた。そのことには実に微妙なる関係があって、父は「感謝せらるる医者」から「感謝せられざる医者」に転じたわけである。精神病医者というものは、患者は無論患者の家族からも感謝せられざる医者である。³⁾

このように精神病医への眼差しは、患者だけではなく患者の家族も「感謝せらるる医者」から「感謝せられざる医者」への転換という状況であった。なぜ紀一が、患者から信頼を受けていた開業医から精神病院の経営に参画したのであるうか。それは、1900(明治33)年の「精神病患者監護法」により、医者というよりも野心家たる紀一が東京市から精神病の委託患者を預かれば、全額が市からの公費負担となり、患者の浮動性も少なく、安定した病院の経営が可能という事業家たる手腕を発揮したかったからである。しかし、当時の人々の精神病患者への否定的な眼差や、精神病医への評価という時代精神を読み解くならば、紀一の行動は破天荒の事業といえよう。



浅草三筋町 (筆者撮影)

茂吉は上京し、東京府開成中学校へ通学した。同校は神田淡路町のニコライ堂の下にあった。さて茂吉にとって浅草三筋町は、「青春発動期」を過ごした場所であり、1896(明治29)年から1899(明治32)年まで浅草三筋町に住んだ。なお『三筋町界限』では「青春発動機」らしく、芸妓ぼん太⁴⁾のことが記されている。その後神田和泉町に転居し、1902(明治35)年に第一高等学校に入学し寮生活をし、1904(明治37)年に寮を退出し、再び神田和泉町へ、1907年(明治40)には青山脳病院へ転居した。

茂吉は、浅草病院で養父紀一の背中越しに、医者の方原風景を見て、自らが医者となることを自覚し覚悟したのであった。しかし、その後「感謝せられざる医者」である精神病医となることが宿縁となった。岡井隆は、浅草医院時代の茂吉について次のように言う。

茂吉は、浅草医院の紀一を、いやが上にも理想化し、温かい町のお医者さんだったころがなつかしかったのではなかったのでしょうか。なん人も医書生たちが、青春をたのしんでいたようであり、済生学舎という私立の医療施設も、なかなか面白い。(略) 医者になる道が、まだ国家によって一本化されていなかったころの、草創期の手づくりの医者の方原さだだったかも知れません。⁵⁾

茂吉は山形県金瓶村から上京し、訛もあり東京の下町の生活にすぐには馴染めず、初めて見る診察風景、医者の仕事にも戸惑ったであろう。紀一が適切な治療を施すことが難しかった症例もあろうが、そのような事例を捨象し、「赤ひげ先生」の如くに下町の開業医紀一のことを回想している。このように茂吉は、世人を瞞着することなく、素顔の紀一を医者理想型として描き憧れていたと捉えられるが、むしろ茂吉自らの医者理想型を描いたとも言えよう。浅草三筋町の浅草医院での生活は、茂吉がこれから医者となるために、浅草と言う風土が醸し出した原風景なのである。

浅草医院のあった場所には、茂吉の歌碑がある。現在の台東区三筋2丁目16で、三筋保育園近くにある。

浅草の三筋町なるおもひでもうたかたの如や過ぎゆく光の如や

（『つゆじも』大正9年11月）

茂吉が長崎医学専門学校教授の時に、三筋町を懐かしんだ歌である。精神医学の研究者であり臨床医として忙殺される日々を過ごす中で、浅草三筋町という土地だけではなく、浅草医院という開業医のことも懐かしんだのであろう。

2. 東京府巣鴨病院

養父紀一の期待に応え、茂吉は第一高等学校から、東京帝国大学医科大学への入学が決定した。すると1905(明治38)年7月1日に、正式に紀一の次女てる子の婚養子として入籍したのであった。卒業後は、紀一が青山脳病院を経営していたので、本人の意思を問わず精神病医となることが決定づけられた。なお、茂吉は腸チフスに罹患し卒業試験を放棄し、漸く一年後に合格した。病気療養の期間があったにしても、卒業試験の結果は医学生132人中、131番であった。

開成中学校在学中、茂吉は放課後になると小川町通り、神保町通りを経て、九段近くまで古本屋を巡るのが楽しみ

で、日の暮れ方になって浅草三筋町に帰宅するのであった。神保町の古本屋で呉秀三の『精神啓徴』(初版)を拾い読みしていた。それは茂吉が、東京帝国大学医科大学へ入学する前から、正岡子規の『仰臥漫録』で、精神病医の呉秀三を知っていたからである。「巴里浅井氏より上の如き手紙来る」とあり、その絵葉書が貼られ、呉秀三の一文が記されている。

只今は帰りがけに巴里によりて遊居候 ^{ひさしぶり} その内に帰朝致久振にて御伺申すべく存候 御左右その後いかが被為入候哉 三十四年八月十八 呉秀三⁶⁾



巣鴨病院煉瓦堀跡（筆者撮影）

そして、第一高等学校の学生になると、本郷の書店で呉秀三の『精神啓微』(第二版)を購入した。また、茂吉は第一高等学校教師であったプッチール (Fritz Putzier) の胸像除幕式で、呉秀三が教えを受けた総代として演説する姿を見たのであった。

1905(明治38)年に東京帝国大学医科大学へ入学すると、7月はじめから法医学教室の講堂で呉秀三の心理学講義を受講した。1910(明治43)年12月の末に卒業試験に合格し卒業した。その後、1911(明治44)年2月に東京帝国大学医科大学副手、附属病院(東京府巢鴨病院)となり、同年7月には東京府巢鴨病院医員となった。院長は呉秀三である。『呉秀三先生』という随筆があり、呉秀三の回診風景を回顧する。

先生の回診は病室の畳のうえに据わられて、くどくどと話す精神病者の話を一時間にてても二時間にてても聴いておられた。それがいかにも楽しそうで、ちっとも不自然なところがない。私は先輩の医員の後ろの方から、先生の如^{かくのことき}是態度を覗見ながら、先生の「問診」がすなわち既に「道」を楽しむの域に達しているのではなかるうかなどと思ったことを今想起する。⁷⁾

まさに「道」を楽しむの域とは、呉秀三は、良い意味での医の「道」を究めた道楽者なのである。茂吉は、呉が精神病患者と共振する空間を目の当たりに体感したのであった。呉は精神病患者に使用していた手枷、足枷を禁じ、作業療法を組織的に推進するなど、従来の監禁し収容する精神病院から、治療する病院へと転換を図ったのであった。茂吉が呉と邂逅し、臨床医として病者に寄り添う心構えを会得したのであった。まさに巢鴨病院は、茂吉が精神病医として懊悩し成長していった原風景なのである。⁸⁾そして、三筋町の浅草医院とは別世界、あるいは異次元の空間に、自らの意思を問われることもなく、身を置くことになったともいえよう。茂吉は第一歌集『赤光』において、自らの精神病医を「狂人守」と詠んだのである。決して、差別や排除の意思は無い。病者に寄り添う(ケアする)茂吉の姿なのである。

巢鴨病院は、向ヶ丘にあった東京癲狂院が、1886(明治19)年6月に小石川駕籠町45番地に移り、1889(明治22)年東京府巢鴨病院と改称され、東京帝国大学医科大学精神病教室の附属病院を兼ねた。茂吉は医員として、1911(明治44)年7月28日から1917(大正6)年1月31日まで、約6年間勤務した。月給20円で手取り18円であった。なお、1912(大正元)年11月14日には東京帝国大学助手に昇任した。駕籠町の名前は、現在文京区立駕籠町小学校、駕籠町公園として残っている。

次に『日本二於ケル精神病学ノ日乗』より巢鴨病院の記事を抜粋する。

明治十九年(1886)六月

東京府癲狂院を小石川区駕籠町四十五番地に移転す。此移転に就ては移転費として宮内省より金一万五百二十二円五十七銭五厘の下賜あり。且旧来敷地の内九千二百一十一坪二合二勺を宮内省に分割譲渡したる為め、其代価金二千七百二十六円五十一銭一厘を得、合計金一万三千二百四十九円八銭六厘を以て本院の敷地一万七千二百四十八坪八合三勺

を購入し、九百二十七坪二合勺の建物を築造したり。明治十九年十二月更に病室を増築せり。同院に於ては此月より初めて自費入院の制を定め自費患者を二等に分ち、一等一日七十五銭、二等一日三十五銭の入院料を徴収することゝなす。⁹⁾

呉秀三の『我邦ニ於ケル精神病ニ関スル最近ノ施設』には、東京府巢鴨病院の平面図や写真等と共に詳しく施設の説明がある。自費病室については、次のような説明がある（明治44年時点）。

自費病室トシテ煉瓦造ノ自費室ノ建設サレ其敷地ニアリシ旧病室ヲ他ニ移築改造シタルト作業室並ビニ看護人寄宿舎ノ新設トニアリ此煉瓦造ハ四棟ニシテ其三棟ハ構造略同ク二大室ト六小室トヨリ成り各一又ハ二ツノ外廊アリ一棟ハ小室九室ヨリ成り隔離室用トス¹⁰⁾

建物として、病室（煉瓦造26室、木造65室）があり、その他を列举するならば、隔離室（木造8）、伝染病隔離室（木造8）、講堂、研究室、外来患者診療所（木造2）、医局、薬局、製薬室、診察室（木造2）、院長室、副院長室、看護長詰所（木造2）、器械室（木造2）、事務室、応接室（木造2）がある。

次に医員宿直室、看護長宿直室（木造2）、調剤員宿直室、書記宿直室、看護人詰所（煉瓦造3、木造22）、湯呑所、配膳所（煉瓦造2、木造2）、男看護人寄宿舎（木造8）、女看護人寄宿舎（木造8）、看護人食堂（木造2）がある。

そして、病室内物置（木造25）、倉庫（木造5）、患者作業室（木造2）、外来供待所、門衛所、炊事場、病室内廊下、渡り廊下、浴室（煉瓦造3、木造6）、洗面所（木造11）、便所（煉瓦造3、木造21）、病室内汚物洗浄場（木造6）、室外汚物洗浄場（木造2）、洗濯場（木造2）、洗濯物乾燥室、汚物焼却場（石造）、付属建物（木造5）、薪炭置場（木造2）、屍室、豚小屋（木造15）、豚番小屋がある。

煉瓦造の病室は自費患者で、木造は公費患者である。豚小屋もあったのである。また、1911（明治44）年における看護長は男3、女3、看護人男72、女62、患者数430であり、看護人一人に対スル患者数は3.1である。¹¹⁾

なお、正規の業務記録である当直日記の他に、巢鴨病院の医局落書き帳である『卯の花そうし』¹²⁾が発見され、梁山泊とまで言わぬが、おおらかな医局の状況が描かれ、素顔の茂吉像を窺うことができる。また、巢鴨病院から1キロ足らずの小石川指ヶ谷町には白山花街があった。

なお、『赤光』の秀歌「おひろ」のモデルが白山花街の女性という説もあるが、結論は出ていない。¹³⁾ また茂吉は、巢鴨病院医員を辞し、長崎医学専門学校教授へと転身し、その後、博士号の取得のため欧州へ留学したのであった。

3. 青山脳病院

養父紀一は、明治33年にドイツへ留学し精神医学を研鑽し、明治35年に帰国すると、神田和泉町の東都病院を帝国脳病院と改名した。紀一は帝国脳病院院長となり、明治36年4月には赤坂区青山南町5丁目に2,760坪の土地を15,000円で購入し移転した。建坪250坪の建築を始め、3万円を投じ同年8月30日には第1期工事が完成した。明治37年には第2期工事、明治38年には第3期増築工事、さらに第4期、第5期と増築し、明治40年には10万余を投じた偉容を誇る青山脳病院が完成した。¹⁴⁾ 病院正門の門柱には左に「青山病院」、右に「帝国病院」とあった。紀一は自らをドクトル・メディーチネ・キイチ・サイトウと称し、外遊した時に「帝国」の威力を目の当たりにして「帝国」への拘泥があったのである。



青山脳病院・松原本院跡 (筆者撮影)

病院案内「帝国脳病院・青山病院案内」¹⁵⁾や配置図¹⁶⁾を見ると、病院の施設の概況が分かる。紀一がローマ式と称したシンメトリーの建物の正面(ファサード)には尖塔が7つ並び、玄関上部には時計塔を掲げた。そして「珊瑚室及明鏡室」「明鏡室」「一号館二号館」「娯楽室」「軽症室」「安静室」「治療浴室」「最新式安全治療浴室」「緑色治療所」「蒸気消毒所」「炊事場」「図書室」「玉突場」などがある。

茂吉は欧州留学中であったが、1923(大正12)年9月1日に起きた関東大震災で、青山脳病院の屋根瓦は全部落ち、煉瓦や柱に損害を受けた。しかも入院料の支払いが滞り、病院の経営が悪化し、茂吉の留学を早める結果となった。

1924(大正13)年12月29日、青山脳病院は全焼した。午前零時25分餅つきの残火から発火し、3時25分に鎮火する。入院患者300余名中20名が焼死するという惨事となった。時価160万の損害で、しかも火災保険が11月15日で失効していた。茂吉は、欧州留学の帰途で、香港、上海間の榛名丸船上にいた。12月30日午後11時に、茂吉は無線電報を受け取った。帰国後、青山脳病院の焼け跡に佇むと、鉄柵の門と煉瓦塀の一部を残すだけであった。



青山脳病院跡 (筆者撮影)

その後の青山脳病院の再建は困難を極めた。地域住民の反対運動が起こり、青山から東京府松原村松原(世田谷区松原)へ移転することとなった。そして、1926(大正15)年4月7日に、青山脳病院を再建し開院した。以後、松原を本院とし、青山の焼け跡の診療所を分院とした。その後1927(昭和2)年4月27日に、患者の逃走、放火未遂と器物損壊などの病院事故が多く、警視庁より紀一院長更迭の示唆があり、紀一に代わり茂吉が青山脳

病院長の職に就くことになった。

指令第12760号

赤坂区青山南町五丁目八十一番地 斎藤茂吉 昭和二年四月十二日願私立精神病院青山
脳病院ノ業務継承ノ件認可ス、昭和二年四月廿七日 警視総監宮田光雄 警視総監之
印¹⁷⁾

この頃の本院の入院患者は300余名であった。派手好みで大言壮語な紀一に対し、地味で固陋で癩癩持ち、謹厳実直な茂吉とは相対する性格であった。1928(昭和3)年11月17日に養父紀一が熱海福島屋で心臓麻痺のため死亡した。茂吉が青山脳病院院長として悩まされるのは、患者の逃亡、自殺などであった。青山脳病院の茂吉については既に論じている¹⁸⁾ので、重複は避けるが、茂吉の診察風景の資料は乏しい。長男の茂太は次のようにいう。患者に寄り添う臨床医茂吉の一面が垣間見える。

午前の外来診療がすむと、父は白衣姿のまま、病院の玄関から、表の通りを歩いて、隣接した自宅へ帰り、ぱっと白衣をぬぎ、そそくさと食事をすまし、また病院へでかけて行った。午後は来客との面会日にあててあった。忙しい日は、白衣をぬぐのを忘れて、白衣のまま食卓に向かうこともあった。診察日すなわち面会日には、口が臭うといけなうと言って、朝から大根やねぎの類は食べなかった。(略) 病院には乗用車二台のほかに、連絡や医師の往診用に、ハーレー・ダビットソンのサイドカーが一台あった。¹⁹⁾

患者から見た茂吉については、1936(昭和11)年から2年2か月、青山脳病院本院に入院した鈴木一念に、「松澤本院に於ける茂吉」という回顧がある。鈴木一念こと金二は、鈴木信太郎画伯の弟であり、茂吉に師事し『アララギ』に入会したが発病した。入院中の『アララギ』の会費を茂吉が肩代わりしていた。1938(昭和13)年7月には全快し、茂吉が就職の世話もした。長い引用となるが、次のようにいう。

「松澤本院」とは世田ヶ谷区松澤町、松原。青山脳病院本院を指し、(略) 患者二百五十名、従業員五六十名ほどを擁してゐた。そして斎藤先生自宅の青山南町の高級入院患者三十名ほど診察の方を「分院」と称してゐた。(略)

先生は毎週水曜の「院長日」に、青山から自動車で本院へ来られた。其の日は私に執つて何となく恐ろしくもあり楽しくもあつた。院長先生も月給で、其当時「三百円」と聞いた私は(例へその頃としても)「其薄給で院長としての経営、診察の全責任を持たれるとは大変だなあ」と慨嘆した。²⁰⁾

さらに、青山脳病院本院の状況を次のように回顧する。患者から精神病医茂吉を描写する貴重な資料である。

松澤本院は八棟ほどの病棟から成り、常緑樹の大小がそれを囲み四季の花々が次から次へと咲き乱れ、医師も従業員も看護人、看護婦の仲間の狂人たちも(中には病気の為の意地

悪や凶暴者も居るには居たが) みんな良い人や親切な人達ばかりで、若し私に病苦自責なく不祥事なく之加、妻子や定職まで備わつてゐたら恐らく其処は「わが生涯での極楽浄土」だつたと言つて良いだろう。

それ程、即ち草木花卉建物及設備の点にも先生の配慮や設計は(病院の隅々にまで)神経や血が通つてゐた。毎年四回ぐらゐ患者大慰安会が催され、小会は患者自発で毎月一回続けられた。私も俳優になつたり舞台装置を手伝つたり、歌謡曲、声色等まで一心に稽古した。

病院従業員には先生郷里の東北出身者多く、米も常に山形県から呼び、上野駅からトラックで来たのを私達は倉庫へ運搬したりした。

炊事場へも時々廻つて来られ、私たちが馬鈴薯の皮を剥いてゐる所へ立たれ、「それは皮を取らないで丁寧に良く洗つて煮るとか、茹でる丈の方がビタミンが逃げないでいいんだがねえ・・・。」と言はれたりした。今なら常識だが、之は二十年も前の話で私たち炊事人は、みな狐につままれた様にポカンと聞いてゐた。

第六病棟は私が入院した時には未だ出来たばかり「新館」と特称され、先生苦心と自慢の設計で耐火病棟の魁なのだ相だ。其処へは他病棟から通ずる長い廊下もコンクリート、天井は耐火鉄板で、雨天は患者運動場に変化し得るのが先生の味噌であつた。(併し戦災で此の耐火建築も耐火廊下もみな爆破した相だ。)²¹⁾

患者には年4回季節毎にレクリエーション大会が開かれていた。また、茂吉は火難での労苦の体験から、再び患者の犠牲者を出さないように、病院の耐火対策に腐心し、他院に先駆けて工夫を凝らした設計をした。これは院長の経営手腕というよりも、臨床医茂吉の手柄が滲み出ている。

私が其の長いコンクリートの坂の廊下や鉄板天井の掃除をする所へ先生の行列が来て、(院長廻診は六七人の御供が従くのが其頃の習慣であつた。)^つ「鈴木君、掃く時に少しづつ途中へ掃き溜めて、あとで掃き取る様にすると埃にも成らぬし、仕事が楽かもしれないよ」と言はれたりした。

後日、(之は私の現在勤務の病院長の談だが)「斎藤先生は月次の脳病院々長会議の時、いつでも終始黙々としてゐるから少しも偉い人だと思はず、寧ろ凡才の二代目、組し易い人だとばかり思つてゐた」云々。但し、黙つて居たが内外に人望人徳はあり、殊に松澤本院の従業員たちに殆ど不平不満が無かつたのは不思議な位で、²²⁾

病院内では緩慢に時は流れ、「大名行列」ほどではないが、院長回診があり、仄々とした風景を切り取つたようである。恩師呉秀三の診察スタイルの継承である。雄弁であつた養父紀一に相反して、訥弁ながらも、患者と溶け込み聞き上手であつたと思われる。また、次のように言う。

併し廻診の時の、現実と冥想の二重世界を同時識しつつ微笑しつつ病室や廊下をゆく或時の先生の姿が、半治療の狂人達には不可解に印象される時があるらしく、「院長も少し可笑しいのではないか」そんなことを私に囁く者もあつた。²³⁾

鈴木一念の回顧通りであったかの真偽は不問にしても、茂吉が理想とした診察の原風景は、巣鴨病院の恩師呉秀三の診察スタイルを継承したのである。乏しい資料とは言え、茂吉の診察風景は呉秀三を模範とし、患者に寄り添い共振する「道を楽しむ」境地へ一歩でも接近しようとするものといえよう。医者と患者が垂直関係ではなく、平行に寄り添う姿勢である。まさに「包むもの」と「包まれるもの」とが一体となったような診察である。家人に対し癩癩を起す茂吉であったが、患者に対しては穏和で、声を荒げることもなく、患者から暴力を振るわれることもあったが、臨床医としての責務を一途に果たすのであった。

戦時下の1945(昭和20)年5月18日に、青山脳病院は東京都に譲渡され、東京都立松沢病院分院梅ヶ丘病院となった。²⁴⁾ 東京都に譲渡されたが、空襲により灰燼に帰した。茂吉は1927(昭和2)年4月27日から1945(昭和20)年5月18日まで、青山脳病院院長であった。ここでは二首を取り上げる。

ゆふぐれし机のまへにひとり居りて鰻を食ふは楽しかりけり

(『ともしび』「この日頃」昭和2年)

このまま鑑賞すれば、茂吉の鰻好きは有名なので、診察終了後に、漸く一息ついて、夕餉に用意した大好物の鰻を、誰にも邪魔されず、明日への英気を養うために、一人黙々と食べる至福の一時を詠んだと読み取れよう。しかし、茂吉にとって1927(昭和2)年は、院長に就任し、患者の逃走、自殺など艱難辛苦の一年であった。茂吉にとって、苦悩から解放される刹那であり、哀愁が漂う光景である。

茂吉われ院長となりいそしむを世のもろびとよ知りてくだされよ

(『石泉』「世田谷」昭和7年)

「知りてくだされよ」に込められた茂吉の思いは、如何なものであろうか。歌人ではなく、精神病医、ましてや青山脳病院院長であることを誰も知らないであろうという、悲痛な叫びに聞こえてくる。戦前の精神病患者への差別や排除の状況は、想像を絶するものである。精神病患者に寄り添う茂吉ならではの体験が、作歌においても新たな地平を拓いたのである。

注

- 1) 1920年に坪井秀満が和平病院を設立し、現在、坪井医院となっている。
- 2) 阿川弘之・北杜夫編(1986)『斎藤茂吉随筆集』岩波文庫、pp.279～280
- 3) 同書、p.289
- 4) 同書、pp.291～295 茂吉は、浅草でぼん太(本名、鹿島糸津)の写真を見て「私は世に実に美しい女もいればいるものだと思ひ、それが折にふれて意識の上に浮きあがって来るのであった。ぼん太はそのころ天下の名妓として名が高く、それから鹿島屋清兵衛さんに引かされるということで切

りに噂に上った頃の話である。」という。なお大正初年頃、青山脳病院慰安演芸会にぼん太が招かれた。後に、茂吉は多磨墓地のぼん太の墓に詣でた。

- 5) 岡井隆 (1993)『愛の茂吉 リビドウの連鎖』p.184
- 6) 正岡子規 (1983)『仰臥漫録』岩波文庫、p.68
- 7) 『斎藤茂吉随筆集』p.152
- 8) 拙論 (2010)「斎藤茂吉と病者との共生」文京学院大学外国語学部 文京学院短期大学紀要第10号、pp.191～205 に、茂吉の精神病患者への眼差しについて詳しく論じた。
- 9) 樫田五郎 (2003)『日本ニ於ケル精神病学ノ日乗』創造出版、pp.183～184
- 10) 呉秀三 (2003)『我邦ニ於ケル精神病ニ関スル最近ノ施設』創造出版、p.87 なお、近藤祐『脳病院をめぐる人びと－帝都・東京の精神病理を探索する』(2013) 彩流社、pp.55～61にも詳細を説明している。
- 11) 同上、p.96の表より。
- 12) 藤岡武雄 (1987)『新改訂・年譜 斎藤茂吉伝』沖積舎、pp.133～143に「秘録『卯の花そうし』』という一章があり、写真で落書きが数枚紹介されている。茂吉自らが書いたものもあるが、茂吉の事が書かれている所が多く、茂吉の言動や行動は、病院内ではある意味で話題の人であったようである。
- 13) 同上、pp.140～143 花街は芸妓屋、待合茶屋、料理店の三業よりなる。なお、茂吉付の女中「おこと」がモデルという説もある。
- 14) 斎藤茂太 (1971)『精神科医三代』中公新書、p.47
- 15) 同書、pp.59～66
- 16) 呉秀三『我邦ニ於ケル精神病ニ関スル最近ノ施設』P.112
- 17) 斎藤茂吉 (1973)『斎藤茂吉全集』第29巻、岩波書店、p.355
- 18) 拙著 (2016)『斎藤茂吉 悩める精神病医の眼差し』ミネルヴァ書房、第6章～第10章pp.159～258 拙論「近代医学へのまなざし-斎藤茂吉と青山脳病院」日本近代文学館編 (2020)『文豪たちの東京』勉誠出版、pp.124～125
- 19) 『精神科医三代』p.142
- 20) 『アララギ 斎藤茂吉追悼号』(1953)アララギ発行所、p.p.152～153
- 21) 同書、p.153
- 22) 同書、pp.153～154
- 23) 同書、p.154
- 24) 1948(昭和27)年4月に小児の入院を始め、1952(昭和27)年11月に東京都立梅ヶ丘病院となり、1974(昭和49)年6月には、小児専門病院となった。そして、2010(平成22)年3月、東京都立清瀬小児病院、東京都立八王子小児病院と統合され、東京都立小児総合医療センター(東京都府中市)となり閉鎖された。現在は、「東京リハビリテーションセンター世田谷」となっている。

(2022.9.20 受稿, 2022.10.26 受理)